

暫く前のことになるけれど、本紙の昨年十二月十二日付紙面に、「故・仁井田隠氏の蔵書 松高記念館に寄贈」という記事が出ていた。旧制松本高校出身で中国法制史の権威、故・仁井田陞(にいだ・のぼる、一九〇四—一九六八)博士の蔵書が、松本市あがたの森の旧制松高記念館に寄付されて「仁井田文庫」として公開されることとなり、お弟子の佐伯有一・東大名誉教授が寄贈目録を作成中との記事である。

まず仁井田博士ご自身の学問的業績に触れねばなるまいが、長く東大の東洋文化研究所教授の任にあられ、ロンドン大学遊学中に病に倒れた博士は、中国法制史や中国社会学の分野において、わが国を代表する権威であつたばかりか、世界的に見ても先駆的なお仕事を残された碩学であり、そのお人柄によつても多くの研究者に慕われた方である。法制史や社会学の分野は、戦後、イデオロギ一的な史観が優位を占め、今日の時点で中国の過去と現在を通観したとき、時代の変化に耐えない研究が数多いのだが、仁井田博士の業績は、今日でも大いに検索されるべきものだとはいわねばならない。

現代中国学を専門と

ひらき出し

いて

する私自身は戦後派でもあり、仁井田博士の教えを直接受けたわけではない。ただ、私がまだ学生の頃、当時、茗荷谷の外務研修所に同居していた東洋文化研究所で一度だけ博士の講演を拝聴したことがあつて、強く印象に残っている。もとよりのこと、そのご著作は最近も見つけ中国学体系

### 「仁井田文庫」の意義

はしばしば纏まとめており、多くの教示を得ている。しかし、それ以上に

博士と私を結ぶ接点は、私が今日でも親しくさせていただいて中国社会学史の権威、今堀誠二・広島大学名誉教授の恩師が仁井田博士だということである。

今堀教授は、現在、

堀教授の処女作「北平市民の自治構成」(文

求堂)に「序」を寄せられているのが仁井田博士である。そして、今堀教授は、学界屈指とも思われる膨大な量の蔵書や史料を蒐集されており、仁井田博士と同じお子様もないので、しばしば私がご下問にあずかることもあるといった次第である。こうしたご縁であるだけに、仁井田博士の蔵書が、私の郷里・松本に永久保存されることになったことに、私は大いに感銘を受けたのであった。

東京で出身の仁井田博士は、生前、松高時代の生活を大変懐かしんでおられた様子である。博士はかつて、こう語っていた―「私は高校(松本)の三力年間を寮でくらし、休日にはよく近くの美ヶ原や王ヶ鼻に出かけ

た。静かな高原にすずらは咲き、かつこうは鳴いていた。…高校の漢文の先生は、松本藩儒の家筋の岩垂憲徳(蒼松)先生であつた。私は平凡な学生であつたが、学校の成績に多少の『分』があつたとすれば、それは漢文の点と作文の点などのためであつた。…それで一年のとき、私は皆から『孟子』というニックネームをもらつていた。』(中国の法と社会と歴史―研究生活三十五年の回顧)、『中央公論』一九六四年七月号)。

(中嶋 禎雄・東京外語大教授)